令和4年度学内版 GP　成果報告書

取組名称	「国語科」の資質・能力を育成するための学習デザイン―附属図書館・附属学校園と連携した学びの実現―
実施組織	教育学部
※連携する他学部・機関がある場合は記入	教育学部附属学校園、教育学部附属図書館、松本中央図書館
取組責任者（所属）	西　一夫　（教育学部）
取組の目標	「国語科」の資質・能力を育成するために、 ・教育活動を支え、実現する上で不可欠な専門的知識・技能を習得し、 ・他者と協働して教育活動を具現化して、 ・理論と実践との往還によって先進的な教育活動を実現できる。
1． **目標達成のために行った活動と，その成果** ※活動，成果ごとに番号を付けて箇条書きで記載する。 ※成果の詳細は必要に応じて別添 としてもよい。	【活動】 1．専門的知識の習得：①教育活動の基盤となる言語の教育において「読むこと」の学習活動と読書の指導技術の育成について概要を講義（SDGs 教育）。②関連する新聞記事を参照して具体的な学習活動の構想を立案（NIE 教育）。 2．専門的技能の習得：①他者との協働した教育活動の具体例として話し合いツール「えんたくん」を活用した実践例のビデオ視聴と体験学習への選書活動の方法を習得（読書紹介）。②附属図書館をフィールドとして読書活動の推進活動として「教師の卵が教師の卵に薦める一冊」のテーマで POP の作成方法と効果とを学習（読書活動）。③学校図書館と GIGA スクール構想との関わりについて、ビデオ教材（佐藤和紀准教授）を作成して学校図書館の新たな展開や授業と連携の具体事例を習得（GIGA と学校図書館）。④図書館を活用した「調べ学習」を実践するため、中等教育での学修実践を紹介し、SDGs のテーマに基づいた学習単元の構想を立案（SDGs 教育）。 3．他者と協働した教育活動の具現化：①話し合いツール「えんたくん」を用いて選書した書籍を紹介し、交流する活動を実践（話すこと・協働的な学び）。②実際に POP を作成して紹介書籍とともに教育学部附属図書館で展示活動を行い、交流・相互評価を行う（POP 作成と評価）。一部は中央図書館でも展示を行った。③受講生が作成した「調べ学習」の単元案を同一のテーマ同士で帯単元に展開させる（学習の協働）。④学習スペースとしての学校図書館の構想をグループで作成し交流活動を行う（学習と空間構成）。 4．理論と実践との往還：①GIGA スクール構想が目指す学校図書館と一般的な公立学校の図書館の現状とを比較検討して改善点を提案する（学校図書館の現在と未来）。②具体的事例として風越学 図 1　POP 展示活動

		園の図書館を甲斐教諭が紹介するビデオを視聴して、新たな学校図書館へのイメージを具体化する（目指す学校図書館）。③教育活動における学校図書館の在り方について、これまでの学びを振り返る（学びの省察）。 【成果】 1．専門的知識の習得：①受講生は学びの環境と言う観点から学校図書館を捉えることができるようになった。②受講生は先進的な事例を新聞を通して学ぶことで多くの実践に触れる機会が持てた。 2．専門的技能の習得：①さまざまな「話し合い」の方法があることを知り、その一つとして「えんたくん」の存在・活用の利点を理解できた。また、選書方法の観点を複数持たせることが出来た。②書店での POP の位置付けと、教育活動で作成する POP の価値とが異なることを理解し、その効果的な利用方法に基づいて POP 作成に臨めた。③今日的な課題と学校図書館とが関わるかを、具体的な事例に基づいて理解することが出来た。④各教科における「調べ学習」の実践的方法と評価について習得した。 3．他者と協働した教育活動の具現化：①「えんたくん」を用いてブック・クラブを実践することで、協働学習として話すことと選書の意味を体験的に習得した。②受講生が作成した POP と書籍とを展示することでその効果やアイディアを共有することができた。また、交流は ICT 機器を活用して実施することで、機器操作や国語科での活用の一端を体験的に習得した。③「調べ学習」の具体を体験的に習得し協働的に単元展開を構想する機会を創出した。④単なる読書空間としてあるのではなく、様々な活動を実現できる空間であることが、提出された資料を共有することで明示的に習得できた。 4．理論と実践との往還：①これまでの学習を通して、学校図書館の新たなイメージを持つことが出来た。②県内の教育機関での具体的な図書館の姿や学習活動について担当教諭から説明を受けたことで、個々の学校図書館に対する印象が変容した。③授業全体を通して個々の学習と全体での学び、さらに読書活動の意義を深める機会を得た。
2． **目標達成度に関わる自己評価，理由，今後の展望** ※a–e から該当するものを選び，その理由と今後の展望を記述	**【自己評価】** 「取組の目標を達成できた。」について a: 非常にそう思う。 b: そう思う。 c: どちらともいえない。 d: そう思わない。 e: 全くそうは思わない。	（自己評価の理由） ・授業者の数が例年よりも多くなったことから、グループ編成や個々の活動が十分に整理・評価出来ない部分があった。受講者の達成感は十分であったと回答した学生が8割あり、一定の成果が認められる。その反面、受講生へのフィードバックが十分でなかった点が省察の浅さに表れていた。 ・また、附属学校との連携が十分に活動に活かせなかった点が課題となる。附属図書館との連携は十分に取れており、受講生が作成した POP は返却を希望する以外の POP は引き続き図書館での書籍展示に活用されている。
		（今後の展望） ・附属図書館との連携は年度初めの書籍展示にも波及しており学部生の学習意欲促進に一定の効果がある。引き続き次年度以降も実施する。 ・授業で習得した知識・技能を臨床場面で活かせるような機会を

		創出したい。 ・地域学校の現状を、Online 等を活用して授業で共有出来る学習プログラムを構築したい。